

対馬で漁獲されるマグロ属魚類の幼魚

福所 邦彦・藤田 矢郎
(1971年11月6日受領)

Notes on the Young Tunas Referred to the Genus *Thunnus*
Caught in the Waters of Tsushima Island

Kunihiro Fukusho and Shiro Fujita

Young tunas referred to the genus *Thunnus* are one of the important resources in the waters of Tsushima Island, Nagasaki Pref., and commercial landings reach 400-1200 tons per annum. Their species name have not been decided, while two types, called in Japanese yokowa and hire-naga (or bin-naga) respectively, were known among fishermen. They were recognized as bluefin tuna *T. thynnus* (Linnaeus) and longtail tuna *T. tonggol* (Bleeker). (Laboratory of Aquiculture, Nagasaki Prefectural Institute of Fisheries, Nomo, Nomozaki, Nagasaki-ken, Japan)

マグロ属魚類の稚仔魚の種の査定および生態に関する見知は多いが、これらの幼魚については報告が少ない。中村(1969)は若狭湾で漁獲されたコシナガ *Thunnus tonggol* (Bleeker)について報告し、マグロ属魚類幼魚の同定は誤りやすく、とくに西日本の日本海側ではクロマグロ *T. thynnus* (Linnaeus) とコシナガの幼魚を混同している恐れがあることを指摘した。

対馬では、例年秋から冬にかけて、主として曳繩でかなり大量のマグロ類幼魚(1966~1970年の例では年間400~1200t程度)が漁獲されているが、今までほとんど調査がなく、種名も不明確であった。長崎県水産試験場では1969年これらの幼魚を種苗とするマグロ類の養殖の可能性を試験する計画を立てたが、中村(1969)の報告も考慮にいれて、まず種名を明らかにする必要が生じた。そして筆者らは、対馬で水揚げされるマグロ類幼魚の中でヒレナガおよびヨコワとそれぞれよばれるものがあることを知り、これらの査定を行なった。以下にその結果を報告する。

ヨコワの材料は1969年9月26日から10月25日の間に当試験場の調査船および漁船の曳繩によって対馬の各水域で漁獲された尾叉長26.5~47.5cm、平均35.9cmの65個体である。ヒレナガの材料は1969年9月21日

対馬西岸の豊玉村廻地先の大敷網で漁獲された尾叉長27.9, 29.2 および 29.8 cm の3個体である。

種の同定には岩井・中村・松原(1965)の分類形質に重点をおき調べた。



Fig. 1. Two species of young tuna caught off Tsushima Island: (A) longtail tuna (Bin-naga or Hire-naga), *Thunnus tonggol* (Bleeker), 27.9 cm in fork length; (B) Bluefin tuna (yokowa), *Thunnus thynnus* (Linnaeus) 27.3 cm.

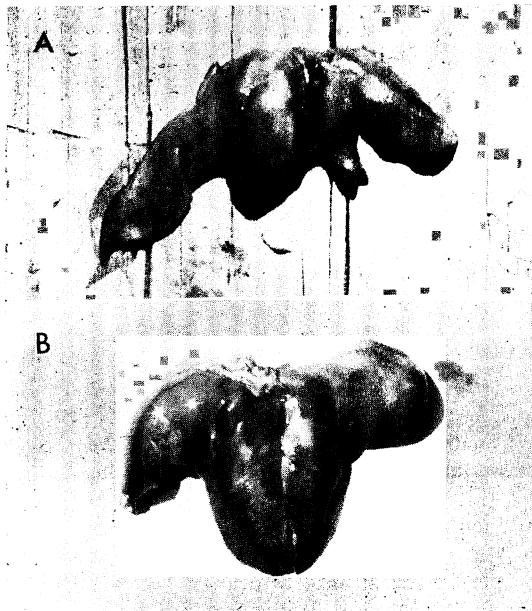


Fig. 2. Ventral view of liver dissected out from body cavity of two species of young tuna.
(A) longtail tuna; (B) bluefin tuna.

ヒレナガ（ピンナガ）と呼ばれるマグロ類幼魚の体形は、肥満せず、やや細い。最も著しい特徴は胸鰭が長いことで、その長さは尾叉長の 0.23~0.28 で、その後端は第2背鰭の前端下に達する (Fig. 1, A)。鰓耙数は 6~7 + 16~17。鰓を欠く。肝臓は 3葉よりなり、右葉が大きく、長く延長する。肝臓腹面の周縁には脈管条がない (Fig. 2, A)。これはコシナガ *Thunnus tonggol* と査定された。

ヨコワと呼ばれるマグロ類幼魚の体形は肥満し、紡錘形を呈する。胸鰭は短かく、長さは尾叉長の 0.17~0.18 で、その後端は第1背鰭の第4棘と第5棘の中間下にある (Fig. 1, B)。鰓耙数は 11~13+22~26。鰓をそなえる。肝臓は 3葉で中葉が大きく、その先端は鈍く尖り、左右両葉は同大で同じく鈍く尖る。肝臓腹面部の周縁には脈管条がならぶ (Fig. 2, B)。これはクロマグロ *Thunnus thynnus* と査定された。

以上の結果から、対馬で曳繩および定置網によって漁獲されるマグロ属魚類幼魚、ヒレナガとヨコワは、それぞれコンナガおよびクロマグロであることがわかった。両種が少なくとも対馬では漁業者の間で古くから明確に区別されてきたことも確認された。なお、対馬におけるヨコワの呼称は和歌山方面から出漁してくる曳繩漁業者がもたらしたもので、以前はシビあるいはシビゴと呼ばれていた。

謝 辞

有益な御助言をいただいた京都大学農学部水産学教室助教授中村泉氏、ならびに原稿の御校閲を賜った同教室の岩井保教授に感謝の意を表する。

引 用 文 献

- 岩井保・中村泉・松原喜代松、1965。マグロ類の分類学的研究。京大みさき臨海研究所特別報告、2: 1-51, figs. 1-24。
中村泉、1969。若狭湾で大量に漁獲されたコシナガについて。魚類学雑誌、15(4): 160-161, fig. 1.

(長崎県野母崎町野母 長崎県水産試験場養殖研究所)